

教科書は常に正しい？

木 村 満

東京都済生会中央病院嘱託
診療情報管理士教育委員会 委員

いきなり不穏なテーマかも知れない。しかも筆者は基礎課程の教科書「診療情報管理Ⅰ」の編集に当初から関わってきた一人である。受講生の皆様に混乱をもたらす意図は毛頭ないことを先にお断りしたい。

これまでの諸先輩の巻頭言にも度々指摘されているごとく、世界は動き、社会は次々と変貌を遂げている。自分たちも変わって行かなければ、と教えられてきた。すべてが次世代のためになるか否かは別として、教科書とはその時点では標準的な「知」、「技術」、「方策」であるはずである。現代はそれらの動き方がどうも早すぎて、とても付いて行くことがままならない。皆様の若い頭脳は、何の問題もないかも知れない。筆者にとっては何とも目まぐるしい時代である。

医療の現場はどうであろう。本教科書にも世界での医学・医療の歴史とわが国における歴史が記載されている。さらに現代医療では国境が消失したごとく、進んだ医学的知識に裏付けされた医療を推進する術（すべ）や最新医学情報が次から次へともたらされている。インフォメーション テクノロジー（IT）の恩恵に浴している面を否定するつもりはないが、情報の整理は個人に任せられ、情報の錯綜を必死に整理する毎日といってもよい。ヒトを対象とする医療の現場に、常に正しく、必要な情報が素早く届けられることも必須である。ITはEBM（根拠に基づく医療）時代には欠かせない手段の一つとなったのも事実。

さて、教科書はどうか？ 残念ながらIT化時代には取り残されそうな姿である。教科書の内容刷新には莫大なエネルギーを必要とする。言い訳がましくさらに申し上げると、最新版の「診療情報管理Ⅰ」は4年間のうちに第4版となった。当初は誤植、内容不備の改定に追われ、受講生の皆様、講師の先生方からの指摘を受けながらの改版であった。序文にもあるごとく、教科書とはいいながら、ICD分類の枠組みにしたがった疾病が並べられ、皆様にとって疾病の理解には欠かせない基礎的知識であるべき「人体の構造と機能」の部分は最小限度に絞られた。また、前述したごとく、科学、技術の発展に伴う疾病自体の概念の新たな展開が見られるとか、新しい治療法の開発やその実践も進んでいる。第4版は成書として一応の姿になったが、読み返すと新たな改定を要する個所が次々と発見されるのである。その意味で教科書は常にすべて正しい、とは言えないものなのである。

完璧なものはこの世に存在しがたい。「教科書は常に新しい」を求めて動いていることをお伝えしたかった。これは受講生の皆様への永遠の宿題へと繋がることでもある。医療に携わる職種が学術・職能団体を形成し、生涯学習を継続する必然や、各種研修会へ参加する意義がご理解いただけると思う。受講生にとってはスクーリングが学習の補完に欠かせないし、現場で活躍中の診療情報管理士の方々にとっては学会、研修会を大いに活用していただきたい。